F-43

福島県土湯温泉における観光まちづくりの展開と過程
東日本大震災発生後の新聞記事を対象として

Evolution and History of Tourism-Based Community Development in Tsuchiyu Onsen in Fukushima Prefecture
A Survey on after the Great East Japan Earthquake used in Newspapers

○有川翔[1]，　天野光一[2]，　西山孝樹[2]
*Kakeru Arikawa[1], Koichi Amano[2], Takaki Nishiyama[2]

Tsuchiyu Onsen, located in Fukushima City, is a hot spring with approximately 1,400 years of history. Recently, due to the aging population and the impact of the Great East Japan Earthquake in 2011, the number of guests at Japanese-style inns has been plummeting and many of these inns are going into bankruptcy.Nonetheless, this onsen town is taking various steps in tourism-based community development after the Earthquake and is now implementing policies to bring back more visitors.In this study, we identified and categorized newspaper articles published after the Earthquake that touch on tourism-based community development in Tsuchiyu Onsen and were able to separate them into four periods. We subsequently analyzed each period.

１．はじめに

福島県福島市に所在する土湯温泉は, 1,400 年余の歴史を有する温泉地であると言われている．ここ最近は高齢化に加えて，2011（平成 23）年に発生した東日本大震災の影響による風評被害，旅館の相次ぐ倒産により，宿泊者数は大幅に減少した.

しかしながら，土湯温泉では先の東日本大震災発生後においては種々の観光まちづくりに取り組み，観光客等を呼び戻す施策を打ち出している状況にある.

２．研究方法

そこで本稿では土湯温泉において，どのような観光まちづくりが行われてきたか，その基礎情報を得ることを目的とした．2011（平成 23）年の東日本大震災後に発刊された読売新聞『ヨミダス歴史館』[1]と朝日新聞『聞蔵Ⅱ』[2]のデータベース中で「土湯」と検索をし, 観光まちづくりに関連する施策を分類, 整理した.

３．研究結果

土湯温泉における記事は，読売新聞で 825 件を抽出することができた．その中から，交通事故や初冠雪等のまちづくりとは関係がない記事を除いたところ, 187 件となった．同様の手法を用いて，朝日新聞では 193 件の記事を抽出することができた. それらの記事から, 東日本大震災以後に土湯温泉で行われてきた種々の施策は 4 期に分けることができた（**Table.1**）.

（１）東日本大震災による避難者対応（2011～2012 年）

2011～2012（平成 23～24）年は，東日本大震災に関する新聞記事が多い時期であった．土湯温泉では，避難してきた人々を旅館が受け入れた記事がみられた（**Table.1**（１）a）．そして，旅館の経営悪化や倒産など, 風評被害に苦しんでいたことにも言及していた. また，2012（平成 24）年には放射線量の高い福島市に住んでいる子供たちを比較的放射線量の少ない土湯温泉へ週末だけ短期避難させる『土湯ぽかぽかプロジェクト』などの記事がみられた（**Table.1**（１）a）.

2011（平成 23）年には，空き旅館や住宅などの活用や交流・定住人口の確保に向け，旅館や商店の経営者らで『土湯温泉町復興再生協議会』を発足させた.（**Table.1**（１）b）.

福島第一原子力発電所の事故を受け，震災発生前から土湯温泉で取り組まれていた地熱発電などのエネルギーに再度注目する記事がみられた（**Table.1**（１）d）.

（２）土湯温泉をまち全体で活性化（2013～2014 年）

東日本大震災の風評被害により，客足が遠のいた土湯温泉をまち全体で活性化していこうとする記事が多くみられた時期であった.

土湯温泉には，引き続いて避難者が滞在していたため，2013（平成 25）年に人々を元気付けるためのバスツアーが企画，実施された（**Table.1**（２）a）.

また，2013～2015（平成 25～27）年には，県内外から 32 組の現代芸術家が集まり, 土湯温泉全体を会場とする芸術祭『アラフドアートアニュアル』が開催された．なお，2015（平成 27）年は土湯温泉とは異なる会場で実施された（**Table.1**（２）b）.

土湯温泉内だけにとどまらず，東京都のふくしま館『MIDETTE』では土湯温泉へ足を運んでもらうため, 土湯温泉の若旦那たちが名物『串こんにゃく』の無料配布などを行った（**Table.1**（２）b）.

さらに，エネルギーに関連しても，小水力発電所と

１：日大理工・学部・まち，２：日大理工・教員・まち

バイナリー発電所が土湯温泉で起工した．バイナリー発電所の見学ツアー実施によっても，観光客を取り戻そうとする動きがみられた（**Table.1**（２）d）．

（３）旅館等の経営者による活動（2015～2016 年）

（２）では，まち全体で遠のいた客足を取り戻そうとする施策が新聞記事で取り上げられていた．続くこの期では，土湯温泉内の個別旅館や店舗の経営者が中心となり，まちの活性化に取り組んでいた．特に，土湯・飯坂・高湯・岳の各温泉に旅館を構える若旦那の活動が活発に行われた．先の若旦那 19 名で企画した『若旦那カフェ』を福島市内の百貨店にオープンさせた．さらに，若旦那と地元大学生らで 2014（平成 26）年に作成した『若旦那図鑑』が月刊少女漫画『シルフ』で連載をスタートさせるなど，土湯温泉の「人」に焦点を当てて，旅館の若旦那が核となった様々な施策に取り組んでいた（**Table.1**（３）c）．

また，地元高校生らが温泉熱による鰻の養殖を行っていた．2016（平成 28）年のイベントでは，その鰻を蒲焼きとして初めて提供した（**Table.1**（３）d）．

（４）新たな客層獲得に向けた取組み（2017～2019 年）

東日本大震災を契機として発足した『土湯温泉町復興再生協議会』が目的とする空き家対策が動き出した．2017（平成 29）年に空き家となっていた「こけし工房」を改装したプリン専門店が開業した．2019（令和元）年には，廃業した旅館を改装した観光交流センターとまちおこしセンターが開業した（**Table.1**（４）b）．

2020（令和 2）年に開催される東京五輪では，福島市の県営あづま球場で野球・ソフトボール競技が開催される．土湯温泉は，その会場から約 5km の距離に所在しており，訪日外国人や若者向けに，和室を洋室に改装したり，貸し切り風呂を整備したりする旅館が登場した．2018（平成 30）年には，新たに訪日外国人の宿泊を狙った旅館もオープンした（**Table.1**（４）c）．

また，バイナリー発電については，その熱源を利用したエビの養殖を行い，温泉内でエビ釣りのイベントを行う程度であった．2018（平成 30）年に入ると，発電による収益も得られるようになった．子供たちの給食費や教材費へあてることができ，地域の活性化に寄与することが可能となった（**Table.1**（４）d）．

４．まとめ

本稿では，土湯温泉における東日本大震災以後の様々な施策に着目し，それらを整理した．

震災発生後の土湯温泉では，避難者の受け入れや旅館の経営悪化が伝えられた．その後，まち全体で観光客を取り戻す施策が種々開催された．これらの動きに呼応し，旅館経営者等による個々の取組みへと波及した．バイナリー発電などエネルギーについても，収益を上げることができ，地元還元もできるようになった．

５．参考文献

[1] よみうりデータベースサービス：ヨミダス歴史館，https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan，2019.9.13 閲覧
[2] 朝日新聞記事データベース：聞蔵Ⅱビジュアル，http://database.asahi.com/library2/main/top.php，2019.9.13 閲覧

Table.1　新聞記事から見た東日本大震災後の土湯温泉における取組み

	（１）東日本大震災による避難者対応 2011（平成 23）年～2012（平成 24）年	（２）土湯温泉をまち全体で活性化 2013（平成 25 年）～2014（平成 26）年	（３）旅館等の経営者による活動 2015（平成 27 年）～2016（平成 28）年	（４）新たな客層獲得に向けた取組み 2017（平成 29）年～2019（令和元）年
a. 震災，避難者への対応	2011（平成 23)年 **16 軒あった旅館のうち 5 軒が廃業** ・受け入れれてきた避難者が仮設住宅に移る ・風評被害による観光客数の減少 2012（平成 24）年 **『土湯ぽかぽかプロジェクト』** ・子どもたちの週末だけの一時避難	2013（平成 25）年 **土湯温泉への避難者と交流** ・避難者向けのバスツアーが実施 ・筑波大学生と土湯小学校の生徒による交流		
b. 温泉街の取組み	2011（平成 23）年 **『土湯温泉町復興再生協議会』発足** ・空き旅館・住宅などの活用 ・住み続けられる地域の構築 ・交流・定住人口の確保 ・安心・安全な地域への整備	2013（平成 25）年～2015（平成 27）年 **アラフドアートアニュアル開催** ・土湯温泉全体を会場とするイベント 県内外から現代芸術家 32 組が集まった ※2015（平成 27）年は土湯温泉では未開催 2014（平成 26）年 **土湯温泉の知名度向上** ・日本橋『MIDETTE』で， 名物『串こんにゃく』の無料配布	2015（平成 27）年 **こけし祭り** ・復興にまち全体で連携して取もうという思いを込め，高さ 2 メートルの絆こけしを土湯温泉観光協会が制作 ※こけし祭りは，東日本大震災が発生する以前から毎年開催	2017（平成 29）年～2019（令和元）年 **空き旅館・空き家に対する具体的な取り組み** ・空き家を利用したプリン専門店を開業 ・空き旅館を改装し，観光交流センターとまちおこしセンターが開業
c. 旅館や商店等地元の人々の取り組み	2012（平成 24）年 **『向瀧』営業再開** ・国と県の補助金により， 老舗旅館の「向瀧」が営業再開	2013（平成 25）年 **新旅館『福うさぎ』開業** ・廃業した旅館を買い取った業者が 1 年半がかりで大規模修繕	2015（平成 27）年 **若旦那会が県内外へのアピールを本格化** ・アラフドミュージック ・『若旦那カフェ』オープン（中合福島店） ・『若旦那図鑑』の発行および 月刊少女漫画誌『シルク』で連載スタート 2016（平成 28）年 **福島高校のスーパーサイエンス部による温泉熱を使ったウナギの養殖**	2017（平成 29）年～2018（平成 30）年 **若者と訪日外国人に向けた旅館の改修・新築** ・和室を洋室に変えベッドを設置する 改修工事 ・外国人向けホステル 『ゆもり温泉ホステル』が開業 ※**タトゥー**を入れた訪日が帰国人客が 温泉を楽しめるように，貸切風呂も整備
d. エネルギーに関連する事業	2011（平成 23）年 **震災前から土湯温泉で取り組まれていた再生可能エネルギーが再度注目** ・再生可能エネルギーである地熱発電に注目	2014（平成 26）年 **新規エネルギー事業の起工** ・小水力発電所の起工 ・バイナリー発電所の起工および 見学ツアーが実施される	2016（平成 28）年 **福島高校のスーパーサイエンス部による温泉熱を使ったウナギの養殖** ※「（3）c. **旅館や商店等地元の人々の取り組み**」と重複する項目	2017（平成 29）年～2018（平成 30）年 **エネルギー事業の安定化** ・地熱の 2 次利用でエビの養殖を行った 養殖したエビは旅館で提供，エビ釣りの イベントを開催 ・バイナリー発電で得た収益により， 小学生の給食費や教材費の支援を実施